

2 部 パネルディスカッション

「佛教大学社会学部のこれまでとこれから」

パネリスト：星野 智子 (大阪女子短期大学学長)

山本 奈生 (本学社会学部教員)

吉見 憲二 (本学社会学部教員)

居場保乃香 (本学社会学部 4 回生)

尾江 俊城 (本学社会学部 4 回生)

コーディネーター：大東 貢生 (本学社会学部教員)

関谷 それでは、定刻がまいりましたので、次のプログラムに移らせていただきます。続きましてパネルディスカッションです。ここからはコーディネーターの大東貢生本学社会学現代社会学科の准教授に司会をお任せいたします。よろしくお願いいたします。

大東 皆さん、改めまして、こんにちは。現代社会学科の大東と申します。ここからはパネルディスカッションといたしまして、特に佛教大学の社会学部のこれからについて、お話を皆さんとともにさせていただけたらと思います。先ほどご講演の中で星野先生より、男女共同参画や女性活躍推進、佛教大学社会学部としてはかなり耳に痛い「女性にとっての魅力というの減少してるのではないか」というようなお話がありましたけれども、わが国の課題として「女性活躍推進」とともに「地方創生・地域活性化」があります。そしてまた最初学部長からのあいさつでありましたように、文部科学省で大学として取り組まなければいけない一つの方法としてアクティブラーニング、要



するに双方向的な学びを取り入れ「男女活躍推進」や「地方創生」などの今日的な課題について大学として取り組んでほしいという流れがあります。こうした現状を踏まえ、今後の佛教大学社会学部の課題について、皆さんとともに議論をさせていただけたらと思います。それではパネリストの先生方のご紹介をさせていただきます。まず先ほどご講演いただきました星野先生です。

大東 次に、本学の若手教員で同窓生でもあります山本先生です。

山本 こんにちは。よろしくお願いいたします。

大東 次に、また若手教員であります吉見先生です。

吉見 どうぞよろしくお願いします。

大東 山本先生と吉見先生は、本学部のアクティブラーニングについて検討しています PBL 推進委員会で現在委員をされ、いろいろご活躍をされています。そして4年生の二人、演台に上がってきていただいていますけれども、まず居場さんです。

居場 よろしくお願ひいたします。

大東 続きまして尾江さんです。

尾江 よろしくお願ひします。

大東 居場さんと尾江さんは、PBL 推進委員会で運営をしておりますグローバル・プロジェクト・マネジャーという資格と、初級地域公共政策士の資格の取得者です。4年間の学びから社会学部の今後についてお話をしていただけるのではないかなと考えております。そしてまた、居場さんと尾江さんは、現在特に1回生の入門ゼミのサポートをしています支援上回生「縁(えにし)」のメンバーとしても活躍をいただいています。ところで、申し遅れましたが、私も現在 PBL 推進委員会の委員長をしております、実はここに3名 PBL 推進委員会のメンバーがそろっています。それではまず最初に、佛教大学の社会学部のこれまでを振り返りつつ、現在の到達点について、お二人の先生方からお話をいただけたらと思います。それでは、まず山本先生からお願いできますでしょうか。

山本 先ほどご紹介いただきました山本です。ご講演を星野先生にいただきまして、ありがとうございます。考えさせられることもまたあって、特にあれほど女性の比率が減っているとは実は知りませんでした、

そうだったのかと。ぜひ、これは次のゼミのテーマにしていろんな統計等も他大学の場合はどうなのか。本学でとりわけ減っているのか。それとも社会学部が減っているのかということに関心を持ちました。

また大学院に関していうと、それほど変わっていないのだという印象を持ちました。お茶を飲みながら学問について語り合って、あるいは懇親会の席でもって知的な問題を検討する。まさにアクティブラーニングですので、大学院はそういう意味では古くからアクティブラーニングを続けてきていて、またそのアクティブラーニングの基礎になる専門書の読解をして、そういうサイクルをやってきたのだというふうに思っていました。

これに対して学部教育はどうかと思い出しておりますけれども、私が学生であった2000年頃ですと、多くの授業はいわゆる大講義で話を聞いて、メモを取って本を読む。ここではインプットはいっぱいあるんですけれども、アウトプットをする機会が昔の大学は、これは本学に限らないことでしょうが、少ない傾向にあったのかなという印象があります。それが2000年代に入ってから社会状況が変化をして就職難ということが明確にいわれてくる。もちろん90年代後半から就職氷河期は始まっているのですが、その中で学生たちが危機感を持ち、また大学は大学でそろそろ少子化が始まってくるぞと、その両者のニーズでもって、徐々に大学と学生たちの心がざわつき始めてくるという過程がこの十数年間の間に起こってまいりました。

その中で日本の多くの大学においては、いわゆるアクティブラーニングを進展させようと試みてきたわけです。それは確かに目に見えた変化の一つであると思いますが、私たちの社会学部の場合、根幹に大事にしているものは実はそれほど普遍的な理念としては変わっていないのではないかと同時に思います。例えば、現在も学部教育のポリシーに掲げているような共生社会の実現や多様性の尊重。これはすぐ就職に役立つとか、あるいはお金を稼ぐための役には立たないかもしれないけれども、長期的に見ていくと、社会それ自体を批判的に見て徐々に変えていくための人間になっていくための教育をしたいという、その理念を手放さずに専門教育を行っていかこうとする考えは、社会学部が保ち続けようとしてきたことであらうと思います。

大東 続きまして、吉見先生お願いできますでしょうか。

吉見 社会学部現代社会学科専任講師の吉見憲二と申します。私は前に発表されたお二方と比べてキャリアが浅く、社会学部に奉職してから今年で 3 年目になります。それまでの学部、大学院、教職のキャリアの中でも実は社会学部に属したことがなく、社会学部の教員をやりながらも社会学のことは全然わからないという立場になります。ただそういった立場から、今度は少し客観的なところから、これまでの資格教育に関する部分をお話しできればと思います。現在、初級地域公共政策士と GPM（グローバル・プロジェクト・マネジャー）という二つの資格教育プログラムを社会学部では実

施しています。大東先生からはその到達点の話をしてほしい、ということだったのですけれど、まさにここに 2 人（居場さん・尾江さん）が、到達点がいるということで、あまり資格教育の話をして面白くないので、資格教育の背景みたいなところをお話しできたらと思います。

最初に学長先生からは「かかわり合う」というお話が、近藤学部長からも「力は 1 人では得られない」というようなお話がありました。山本先生のお話にもあったのですけれど、これまでの教育というのがどちらかというと、インプット重視のものでありましたから、資格教育だとかアクティブラーニングというのは、企業や地域と連携するということだったり、発表の場には同じようなプロジェクトをやっている他大学の学生たちがいたりというような、そういった「かかわる」という部分が大きいのではないかなと思います。つまり、資格教育そのものが本質ではなくて、何かとかかわる機会を作っていくというところに意義があるのではないのでしょうか。学生を取り巻く環境の変化というところで、例えば就職状況は近年少し改善されているのですが、10 年 20 年前と比べて非正規雇用の比率が大きくなっています。学費負担の面では、自分で学費を稼いでいる学生が増えてきているんですね。あと、友人関係の変化というところで、つい最近、学園祭の規模が縮小しているという報道がありました。サークルに入るような学生が減ってきていることが背景にあって、本学では幸いにも今、すごく盛り上がっているのですけれど、サーク

ルに入らない学生だとか、そういった学園祭に出店も出ない、ステージも出さないというようなかたちで、今まで学生がアウトプットとした場がどんどん減っていった現状があります。だから、授業がインプットだけでも学生が勝手にアウトプットという社会から、学生がインプットもアウトプットもできないような社会に、変わってきているのではないのでしょうか。そういった中で、大学での講義がアクティブになることによって、インプットとアウトプットの両面をきちんと提供する必要が出てきたのではないかなと感じております。

本学、先ほど女子学生の人数が減ってきているという話もあったのですが、別のデータで見ると、実は就職状況は女子学生のほうが圧倒的によいです。5 ポイント以上の差で男子学生よりもよかったはず。あとちょうど今、学園祭の最中なんですけど、学園祭の実行委員長は今年おとしは女子学生がやっております。私、自分の母校が今年 15 年ぶりに女子学生が代表になったという話を聞いて驚いたのですけれど、本学は 3 年のうち 2 年は女子学生がやっているので、実は女子学生はすごくアクティブなのかなと思います。もちろんただ女子学生を増やすのではなくて、いかに優秀な女子学生から選ばれるかも考えなければいけないでしょう。一方で、別に男子学生が悪いというわけではないのですけれど、関係性構築なんかを苦手とする学生がすごく増えてきている。それは今まで勝手にサークルなどで学んでくれていたものが、なかなかそうはいかない中で、大学教育だとか個別の教員

で考えなければいけないのかなと感じているところです。

時間も限られているので、私自身の結論を申しますと、学生に何かをやらせるのがアクティブということではなくて、学生と教員がかかわるとか、学生同士がかかわるという部分がアクティブラーニングではすごく大事なのではないかなということです。学生に一方的にやらせるのではなくて、学生と教員が話し合って何かを作っていくとか、ある意味教員自身がアクティブに学んでいくこともアクティブラーニングに必要なことかということを、今、まさに PBL 推進委員会というところで議論しています。そういったことがこれからの社会学部の方向性になってくるのではないのでしょうか。というわけで、資格教育の到達点の 2 人にこれから話を聞いてみたいと思います。よろしくお願いします。

大東 先生方、どうもありがとうございます。インプットが多かったかつての学部教育から、そうしたアクティブラーニングというものを通じてアウトプットを行う、学生と何かかかわるというふうな機会っていうのをどんどん増やしていくというふうなところが、学部の教育としても変わってきたことなのではないかなということをお話をされたのかなと思います。特に先ほどの講演との関係では、女性の入学者が減ってきている一方、就職率あるいは活躍しているのは女子学生が多いというお話でしたが、ここに来ていただいています 4 年生は期せずして女性と男性お二方ということになっています。では、女性の居場さんから 4

年間の学びについてお話をしていただけたらと思います。

居場 現代社会学科4年生の居場保乃香と申します。テーマとして「佛教大学で学んだこと、それを今後どのように生かせるのか」というお話をさせていただきたいと思っています。広い意味で私が佛教大学で学んだことは、「人にものごとを伝えるときは“何を”伝えるのかということだけではなく、“どのように”伝えるのかを考えて伝えるということの大切さ」です。そちらにいらっしゃる大東先生には、大学1回生の入門ゼミの頃から大変お世話になっているのですが、その大東先生がいつもおっしゃっているのが、“何を”だけではなく“どのように”を考えて伝えることの大切さです。4年間学んできて、正直伝えるっていうことがうまくなったというわけではありません。今もこうして話しながら、「どのようになんて考えられんわ」というくらい緊張しています。

本当にいつも“どのように”と言われても「考えることが難しい」って思っていました。4年目の今でもやはり難しいです。これまで入門ゼミだったりプロジェクト演習、グローバル人材PBL、ゼミ、とさまざまな授業で、口頭であったり、動画、記事など多様な手段で人に何かを伝えるということを行ってきました。例えば、ゼミでの発表の話を具体的にお話しさせていただきたいと思います。大東ゼミでは、他学科や他大学との合同ゼミをしたり、大学コンソーシアム京都で開催される政策系研究交流大会で参加したりと発表の機会が多々あります。

3回生のときに、私は「女性活躍推進」を

テーマに5人のメンバーで共同研究をしていまして、パワーポイントのスライドを使って発表していたのですが、テーマが研究していない人からしたら少し難しいということもありまして、発表のたびに「わかりにくい」とコメントをもらっていました。中でも私は「女性活躍推進法」という法律の説明など、難しい内容の部分を担当していたので、詳しい説明をつけ加えるなどいろいろと工夫したのですが、やはり「わかりにくい」というコメントを何度ももらっていました。どう伝えたら伝わるのかなと悩んで考えて、そのとき思いついたのが、実演形式の説明です。そのとき使ったものを今日ちょっと持ってきているのですが、「企業」と書いた帽子をグループのメンバーにかぶってもらって、さらに手作りのパネルを使って、人を企業に見立てて説明を行いました。また、グループのメンバーと相談しながら、スライドを変えるタイミングや「この部分でこういう動きをしよう」など、役割分担を考えて発表を行うようにもしました。すると「説明がユニークでわかりやすかった」や「役割がしっかりしていてよく伝わった」というコメントをもらえることができました。

また、ゼミ以外でも、プロジェクト演習の授業では、京都丹波観光プランコンテストで、子ども向けのスタンプラリーツアー企画のプレゼンテーションをしたのですが、そのときはゆるキャラの着ぐるみを連れていって歌のお姉さん風に話すという工夫などをしました。そのときは全然笑ってもらえなくて、冷たい空気の中でひたすら私が

楽しそうに話す、というのをやりました。優秀賞は受賞できたのですが、そういった「恥を捨てて話す」ということも学びました。

以上のように成功したり失敗したり、恥ずかしかったりとか、「伝える」ということを、経験を重ねることで、内容だけではなくて「どのような伝え方をしたら相手に伝わるのかを考えて伝える」ということの大切さを学びました。この伝え方というのは、これまで発表の場で気をつけていたことですが、今後社会人になって働く中で、プレゼンテーションをするという機会もあるとは思いますが、そのときだけではなく、お客様であったり、社内の人であったり、普通に何かを伝えるときでも、伝える内容だけではなく「どのように伝えたら相手に伝わるのかな」と伝え方を考えながら伝えることで、円滑なコミュニケーションに生かせると考えています。受け取り方は人それぞれですし、考え方の多様性もあります。働く中だけではなくて、普通に人と接していくときに伝え方を考えて伝えることを心がけることで、さまざまな人とよりよい関係性を築いていくことにもつながると思いますし、そうやってこの佛教大学での学びを今後に生かせる、生かそうと思っています。以上で終わります。

大東 どうもありがとうございました。佛教大学で取り組んでいるアクティブラーニングでの学びのひとつの事例を居場さんからお話をしていただけたのではないかなと思います。それでは次に尾江さん、お願いできますでしょうか。

尾江 こんにちは、公共政策学科 4 年生の

尾江俊城と申します。よろしくお願いいたします。先ほど、ちらっとハーブティという単語が出て、「研究室でお茶会みたいなことをしていた」という話もありましたが、僕自身もお世話になっている先生の研究室でコーヒーを出していただいていたりますので、そのあたりは昔とそんな変わってないなと思いながら聞いていました。今日は、僕が今までの 4 年間の大学生活で学んだことについてお話しさせていただきたいと思うのですが、僕が学んだことというのはさきほどの居場さんの伝える力とは真逆で、「聞く力」や「情報を取り入れる力」の重要性についてです。特に感じたのは、大学で主流となっている講義形式の授業以外のことから多くのことが学べるということです。私は初級地域公共政策士というアクティブラーニングのプログラムに参加させていただきました。その内容は、中山間地域に足を延ばして、その地域の方を対象にヒアリング調査を行い、地域の課題を聞いて、その地域課題を解決するためのエコツアーを自分含め 10 人の受講メンバーで考えて、実際にお客様を一般の方々から募集して、そのツアーを実施するというものでした。高校生や大学 1 年生の頃は同じ年代の人としかしゃべってこなかったのですが、このフィールドワークで、実際に地域の方であったり、お客さんであったりと関わる事が出来ました。

また先ほど先生がご紹介してくれた支援上回生という学生支援ボランティアなどもやっているの、先生方、先輩方、後輩など、いろんな年代の方々とお話しさせて頂く機

会がこの4年間とても多くて、普段の生活で接するような学生以外の立場の方とお話しさせていただいたことから、人によっていろんな考え方があるということを知りました。これをきっかけに自分の考えとは違う考え方を受け入れる柔軟性が自分の中に生まれたと感じています。こうした考えの中で、受信するアンテナとフィルターみたいなものを持つことによって、雑談の最中などから、ふとした気づきを得られるようになったと思っています。

自分の中で特に印象的だったのは、自分のゼミの先生がそちらにいらっしゃるのですが、先生と雑談していたときに、「自分にとってそれはどういうものか定義づけする」とっていうことの重要性を教わりました。今まで漠然と「チームワーク」とか「リーダーシップ」とか聞き慣れた、使い慣れた言葉を使っていたのですが、実際「チームワークって尾江さんにとってどういうもんなんや」、「リーダーシップって尾江さんにとってどういうもんなんや」とっていうことを聞かれたときに、ずっと答えられない自分がいたことに4年目にして気づきました。ゼミの高橋先生には1年生の頃からずっとお世話になっていたので「そういう問いかけはもっと早い時期にしてくれよな」とも思ったんですけど、そういった普段何気なく捉えているものを自分にとってそれがどういうものなのかを明確に定義づけることの重要性っていうのを雑談から学びました。

僕も来年の4月から社会人になるのですが、就活をしていて企業の説明会とかで、「社会に出てからも学び続ける姿勢っ

ていうのが重要ですよ」と人事の方から何度も教わりました。この先、社会人になってからは今の自分にとっての大学みたいな学びの環境がなくなるのかなとも思ったんですけども、日々の生活や、仕事の中に一つでも多くの気づきみたいなものを得られていけば、今後、自分が社会に出てからも成長し続けるための推進力になっていくのかなと思いましたし、自信にもつながっていくと思いました。そういった意味で、佛教大学での4年間の生活はすごく役に立っているかなと思います。以上です。

大東 お二方の報告、ありがとうございます。先ほど吉見先生からアクティブラーニングのアクティブというようなのは、学生が何かとかかわることによって学ぶことであるっていうふうなことをお話しいただきましたけれども、まさしく居場さん尾江さんのお話は他者とかかわることによって「伝える力」や「聞く力」を学ぶということができたということでしょうか。今回の記念講演やパネルディスカッションのテーマとして「学んだ力を生きる力へ」というテーマを決めさせていただきましたが、まさしくそうした「伝える力」や「聞く力」を身につけ、社会に出て「生きる力」に結びつけていくという点において、教えている教員としても非常にうれしいお話でした。残り時間も少なくなってきましたが、この後ディスカッションで先ほどのお話を踏まえ「佛教大学社会学部のこれから」についてお話をさせていただければというふうに思います。まず、せっかく前に二人の学生に来ていただいています。普段は多分先生から「こ

うやってみたらどう」などと言われて動くことが多いと思います。せっかくの機会なので、学生の皆さんから質問をしていただき教員が答える、という形式でやっていけたらと思います。そしたら、居場さんのほうからでよろしいですか。ではお願いできますか。

居場 星野先生にご質問させていただきます。女性活躍の話をお聞きして、家庭と家事、家庭と仕事とのバランスであったり、ライフステージごとに優先順位をつけたり、法的なことを盾に職場での権利を主張しすぎないなど働いてからの話ということだったのですが、現時点で女子大学生が女性活躍について知っておいたほうが良いこと、心構えじゃないですけど、こうしていったらいいんじゃないかっていうことは何かありますか。

星野 質問ありがとうございます。やはり女性活躍推進法の本当の意味を知ることが女子学生にとって必要ではないかなと思っています。現在、女性活躍推進法が成立しましてから、さまざまなところでその運用を考えて提出するようという動きがありますが、少し誤った動きがあるというふうに感じております。例えばアフーマティブアクション、「この分野に女性がいなかったなので緊急的に女性の数を増やす」というのは、その意味は理解できるのですが、「女性を入れなければいけないという通達があったので女性を入れる」という扱われ方をするのでは男性にとっては逆差別になりますし、「女性がなぜ優遇されるのか」ということの説明づけもできません。これまで

手薄だった分野に女性の数を増やしていくということは意義があることですが、これも時限的なものですので、「女性が常に優遇される」という意識は捨てなければならぬというふうに思っております。

最近若い方々、勤務して数年の方とお話しする中で、「女性の気持ちを上司がわかってくれない」という発言をよく聞きます。では「女性の気持ちって何なのか」「女性の働き方って何なのか」「女性だからなぜ早く帰りたいのか」その辺が必ずしも本人の中で明確ではない。もちろん妊娠・出産や育児にかかわることで女性が配慮されたり、育児で手当てされたりといったことは労働者として保証されるべきものなのでしょうけれども、あまりにそれを過ぎることを女性たちがやっていくと、かえって「女性を採用したけど、使えない」「女性だから優遇されると思っている」「女性だから働かない、成果につながってない」という結果になって、女性の価値をかえっておとしめてしまわないかという危惧を抱いています。ですから女性活躍推進というのは、育児休暇を取ったことで不利益をこうむった人のキャリアアップ対策をすることか、また育児復帰する労働者の支援・後援をすることか、そのような施策を考えることに注力されるべきで、「過剰なアフーマティブを期待すると、後でしんどくなる」ということは伝えておきたいと思います。

居場 ありがとうございます。

大束 では尾江さん、お願いできますか。

尾江 先ほど吉見先生から、資格教育プログラムに関するお話があったかと思うので

すが、大学の講義内容はまだまだ座学形式のものがメインだと思います。1つ例を挙げると、私のように初級地域公共政策士のプログラムを受講した人数は10人で、これは公共政策学科全体の10分の1に満たない程度の数なので、学科の講義内容を全体的にアクティブにしたほうが良いのではと思ったのですが、なぜ資格教育プログラムではないといけなんでしょうか。

吉見 ありがとうございます。回答する前にすごく学生2人をほめたいことがありまして、実は事前に割り当てられている時間は、1人5分だったんですね。居場さんの発表時間は5分ぴったりでして、アドリブを交えているようでいて、本当に4分56秒とかそれぐらいでした。尾江くんのほうは3分半だったんですが、実は大東先生がコメントすると必然的に時間が減るので、尾江くんが3分半だった結果、2人終わってちょうど10分になっておりまして、大変すばらしい対応をしてくれました。

さて、現状のカリキュラムですと、そういうのはすごく偶然性に左右されてしまうんですね。居場さんだったら、大東先生の入門ゼミに1回生のときに入って、大東先生の指導を4年間受けてきたので、ここまで仕上がったのかもしれないですし、尾江くんは、支援上回生という組織に入って、いろんな先生とかかわりがあったからできたのかもしれない。それがすべての学生に保証されていないというか、たまたまの偶然性ですごく充実した4年間を得られるか、それとも関係性が築けずに、ただ卒業するだけで終わってしまうのが左右されてし

まうのは望ましくないかなと思います。学部として資格教育プログラムをとおして、「こういう学生を育てたい」ということを前面に出していくことが、個々の先生がやられていることに依存しないようなかたちで、学部として目標とするような人材を育てるところにつながるのではないかなというのが私からの回答です。

もう一つ私、今、申し上げたのですが、みんなで育てるものになっていることがあります。先生の職人芸みたいなアクティブラーニングのプログラムではなくて、企業や地域や教員や学生がかかわり合って育てていくというのが資格化している意義であると思いますので、先ほど申しましたように初期の到達点がすごくしっかりしているので、これをどんどん拡大していきたいなというようなことが、私からの回答になります。

尾江 ありがとうございます。

大東 山本先生にも質問をお願いできたらと思いますが、居場さんのほうですか。お願いします。

居場 学生と先生との意識の差についてお伺いしたいと思います。学生は先生が考えるほど社会学の重要性っていうのを意識していないのではないかとということで、社会学に関して理解できて、伝わっているのかっていうことに関して。

山本 ありがとうございます。とても本質的な質問なので、とても一般論としてお答えできないんですけども、今のお二人のコメント、5分間ずつのコメント見てると、吉見先生の繰り返しになるんですが十分伝

わっているというふうにして安心をした次第です。ただ、それはたまたまお二人にはよく伝わっていて、例えば居場さん、尾江さんがいろんな多様な意見を聞いて、それを単に自分が思ったということじゃなく、社会の中で、また他者とのかかわりの中で確認をしてアウトプットをして、わかるように外に出すっていうのはまさに多分ほとんどの先生方が社会学部でやるべきことの重要な課題の一つだというふうには思っておられると思うんです。伝わっているなと思いました。ただ、それをシステムとして多くの学生と共有して、また教員も同時に社会学教える意味って何かなっていうことを教えながら対話しながらやっていく両者のアクティブラーニングですね。それがとても大事で、これから大事になってくるだろうなというふうな感想を持ちました。ありがとうございます。

居場 ありがとうございます。

大東 居場さんが二つ質問をしましたので、では尾江さんからも質問していただければと思います。よろしくお願いいたします。

尾江 わかりました。先ほど、山本先生が社会学の重要性みたいな話をされていましたが、山本先生は現代社会学科で、僕は公共政策学科なのですが、公共政策学科は実習をメインにする学科の方向性のように感じていて、この前、山本先生に社会学の学問としての重要性みたいなものとかを伺ったのですが、社会学部の中でも先生によって「言っていること」「求めているもの」「目指しているもの」それぞれちょっと違うなと感じていて、せっかくの 50 周年記念シン

ポジウムですので、これから社会学部はどうなっていくのだろうかっていうのがちょっと聞きたいなと思ったのですが、どなたにお答えしていただいたら。

大東 社会学部全体の将来に関わる質問で、パネリスト個人が答えるのもどうかと思います。ここは学部長から、お答えいただいたほうがいいかなと思いますので、お願いできますでしょうか。

近藤 先ほど星野先生のお話を聞いてて、耳に痛いことがありました。実は昨日と今日、日本社会学会の大会が東京大学で行われています。昨日の昼あたりから私のところにメールが飛び交ってきてます。どういふことかといいますと「学会の託児所が 20 分離れたところにあって、預けるのも 2500 円かかる」と。10 年前の日本社会学会大会のときに、大学内にちゃんと託児所を設置しまして、ずっとそれが継承されてたんですね。ところが、今年東京大学で日本社会学会が開かれて当然そうだと思って預けに行ったらない。20 分離れているところに、かつ 2500 円だということになりました。社会学はものすごい立派な学問のようにいわれてますが、社会学をやっている研究者自身がその程度です。愕然としてその後もメールを見ていたら、その理事の 1 人の方が「申し訳ありませんでした。託児所はあればいいと思ってました。反省します」というメールがありました。「次回大会からそういうことがないことにします」ということなんですけれども。ジェンダーの部会などもあって小さなお子さんをお持ちの方がいらっしゃると思いますので、社会学会の大会で託児所

の対応というのも昔からありまして、10 年前に整備されたと。とてもじゃないですけど外国みたいにお子さんをそのまま連れて行ってってということまではいきませんが、「大学の中に託児所があって、そこでちゃんとすぐ何かあったらお子さんを見れる」という環境を当然整備しなければいけない。頭では、恐らく社会学者はわかっているんですが、実際男の方々の理事で構成されたところでやると「いつかこうになってしまうんだな」ととても反省しました。

うちの社会学部で「これから社会学をどうしていくか」ということは、社会学という狭い領域だけではなくて大学全体の中の位置づけもありますし、「学生、社会からどういうニーズがあるか、どういう必要性があるか」ということをしっかり聞く。もしくは、ちゃんとそういうことが言ってもとおる学部になりたいと思います。そうやって作っていくしかないのかなと。うちの教員は、恐らく日本社会学会の理事会みたいなことにはならないと思うんですけども、えてして先ほど山本先生から多様性という言葉出ましたけれども、「多様性を尊重する、尊重する」と言いながら、現実の社会にそれが実行できるかどうかは、「決めるほうに実際そのメンバーの方が入っている」ことが非常に重要になってくると思います。女子学生が減っているというのも、ちょっと頭が痛いところでございます。なるべくうちの社会学部、今後社会学という領域だけにはこだわらずに、いろんな方々のご意見や発言を伺い、実際行動ができる、そういう学部にしていけたらなとつくづく思います。

した。

尾江 近藤先生、ありがとうございます。

大束 コーディネーターが少しコメントを挟みすぎまして、時間のほうがまもなく終了となっております。最後にパネリストの方から一言ずついただくかなと思ってたんですけども、その時間も取れないようですので、私のほうからまとめをさせていただきます。実は、この社会学部の記念講演にあたりまして、今回「学んだ力を生きる力へ」というテーマを決めさせていただきました。そのことに対しては、冒頭のところで学長先生がごあいさつをされたというところでありますけれども、佛教大学のスローガンであります「学んだ知識を生きる力へ」とどのように関係しているのかということでいろんなご意見をいただきまして、実行委員会のほうとしてもいろいろ考えてきたところでございます。ただ、特に冒頭の学部長のごあいさつでもありましたように、社会学部といたしましては、この「学んだ知識を生きる力へ」という言葉自体は仏教精神、要するに佛教大学というふうなところで社会学を学ぶ者として、学長先生がお話にありましたように、その学んだ知識というふうなものどういうふうに生かし、生きる力に変えていくのかというふうなところの中で、社会学部としては学んだ知識の中で多様な現代を生きる力というふうなものを、アクティブラーニングによって身につけていくというふうなところを、積極的に追求していこうではないかというふうなことでこのようなテーマ設定をさせていただいたというふうなところでございます。

実際に、パネルディスカッションをさせていただきまして、お二人の若手の先生方から、あるいは学生の皆さんから、こういうふうな力が身につきました。こういうふうな観点でやってます、こういうふうな力が身につきましたっていうお話があったので、このテーマでよかったのではないかなと考えて、ほっといたしました。先ほど近藤学部長からもありましたように、これから先、社会学部がこの先 50 年 100 年と続いていく中で、大切にしていきたいことがあると思います。その一つとして、社会学部教員一同としてアクティブラーニングに取り組みつっと考えていきたいと思いますので、今後とも皆さんのご協力をいただきまして、社会学部の発展のために一同も頑張りたいと思いますので、よろしく願いいたします。それでは以上をもちまして、このパネルディスカッションのほうを終了させていただきます。どうもありがとうございました。

関谷 どうもありがとうございました。もっと時間を取って聞きたかったですね。この続きは、ぜひ 16 時から記念パーティーがございますので、恐らくこのメンバーも皆さん参加されると思いますから、ぜひご質問ご意見等この続きをご期待いただいてご参加いただきたいと思います。ちなみに記念パーティーはこの建物 1 階、地下 1 階の学食を使いまして 16 時から始めさせていただきます。ぜひここにいらっしゃる皆さま方、足を運んでいただきたいと思います。この後の予定ですが、この会場で 15 時 15 分から「佛教大学社会学部同窓会」総会がございます。それから約 20 分後、15 時 35 分頃から「佛教大学社会学会」設立総会と第 1 回大会があります。それが終了後 16 時から記念パーティーということになりますので、ぜひこのままこの会場で残っていただいて、パーティーにもご参加いただきたいというようにぜひよろしくお願いしたいと思います。それではとりあえず第 1 部の記念行事終わらせていただきます。どうもありがとうございました。